【英語科教育学 VIII】 春学期末レポート

担当：M.SA.

Folse, K. S. (2006). *The art of teaching speaking: Research and pedagogy for the ESL/EFL classroom*. University of Michigan Press.

本レポートでは主に、スピーキング活動におけるタスクの性質と各国の活動について取り上げ、まとめている。

The Task that Serves as the Vehicle for Conversation

■ 一般的なタスクを与えられたクラスよりも目的の明確なタスクを与えられたクラスのほうがうまく行うことができる

■ うまく構成されたスピーキングタスクには教師のトーク時間はほとんどない

→ ディスカッションクラスでの教師はレッスンの 80%もの時間を使って話しているが、教師自身そのことに気づいていない

→ 教師は生徒のスピーキング内容を観察するという役割りがある

→ スピーキングの授業で必要とされるポイントは....

①トピックを選定する能力

②何の工夫もないタスクを伴った良いトピックを扱うよりも、工夫が施された通常のトピックの方がより良い授業を展開することができる。

③特定の生徒だけでなくクラスの生徒全員がスピーキング活動に取り組めるように促すことが必要

■ スピーキング活動において、タスクがうまく機能するポイントは...

→ ①タスク内で情報の交換が行われるべきでる

②スピーキング活動を行う前にプランニング活動の時間を設けるべきでる

③答えが一つまたはいくつかに絞られるものにするべきでる

■ スピーキング活動は多くの教師にとって難しいものであるが、上にあげたポイントなどに注意することにより、気軽で楽しいタスクにしてくれる

Research on the Teaching of Conversation

■ 教材のデザインや選択の際の知識で最も重要な３つの要因は...

→　①一連の工夫のされたタスクを統合する能力

②スピーキング活動において工夫のこらされた授業を計画する能力があるか

③ハイ・クオリティなタスクが授業に組み込まれているか

■　スピーキング研究の上で重要な 6 つの基本用語をしっておくべき

① Fluency VS Accuracy

・ここでの fluency はタスク内で生成される量のことを指す

・ただ単にスピーキングをさせるというよりかは、fluency を意識させた活動をさせる

・教室では特定のスキルを磨くための十分な時間が確保できないため、生徒に教室外でもスピーキングの訓練をさせる必要がある。

→実際は、授業外活動により自宅などでの勉強時間がない

・よって、教師の現在の目標は時間の短い授業内で、どれだけ特定のスキルを訓練させられるかである

② Interlanguage

・学習において、間違いは悪いものではない。

→それらは言語的な発達が進んでいる指標になる

・第二言語習得における間違いは、言語習得過程の重要なものと考えられている

③ Comprehensible Input

・生徒の”i”を保つことは言語成長にとっては不十分なものであるため、効果的なスピーキング活動は＋１を目指すよう促す

④ Negotiation of Meaning

・意味交渉をすることにより、会話の中で起こった誤解や間違いを正すことができる

→ex) A：What is “tooleedle”?

B：Two is number. “leedle” is small.

A：Oh Ok. You mean little.

⑤ Pushed Output

複雑なスピーキングタスクにおいて、それに伴い発話内容も複雑になっていくが生徒自身が知っている表現を使用し、なんとか発言しようとする

→　このようなタスクを与えるだけでなく、あらかじめ表現などを指導することが必要とされる

What Does a Conversation Class Look Like?

- Conversation class がどのようなものかという理解しておくことは重要であるが、何が正しいのかという答えは存在しない。

  →国によってもどのような授業が展開されているか異なる。

North America (Chile)

- ラテンという概念はチリにはあてはまらない

  →　時間しっかり守り、礼儀正しく、物静かであった

- チリ、キューバ、スペインではスペイン語が話されるが、文化的にそれぞれ異なるため言語によって生徒を一般化してはいけない
- 他国で指導する場合はその国の特徴や文化できる限り調べて行くほうがよい

→　そうすることで、その国の人たちに尊敬の意を持つことができ、より良い教師に近づく

Europe (Portugal)

- （ハイレベルのクラスのため）ハンドアウトや黒板へのヒントはなしで、かつトピックの選定は生徒自身が行うことにより、生徒手動の会話クラスになっている。

→簡単な語彙の使用や発音間違いの繰り返しや長文の会話を維持するスピーキング能力の欠如が目立った

- Open conversation では、生徒のスピーキング能力の向上が見られないので、教師がテーマを選定し、それにともなって語彙指導や文法指導を導入することにより向上が見られた

→自由度が高すぎる授業は生徒の向上にはつながらない

Middle east (the United Arab Emirates)

- 生徒は全員女性だったのだが、お互い助け合いあいたいと思う傾向があるため、尋ねあいながらタスクを行ってしまった。（尋ねることはせずに翻訳するという指示をだしているが）
- fluency を訓練し、スピーキング力に自信を付けさせる方法として、アラブのことについて質問し、それを説明させるという工夫をした

  → teaching skill というよりかは生徒を知ろうとすることから始め、そこから訓練につなげる

考察

スピーキング活動をする際に注意しなければいけない点は、まず行うタスクの特性を教師自身が把握することであると考える。例えば、難しさやそれに伴ってプラニング時間は必要か情報交換は行われるかなど、“とりあえずスピーキング活動を取り入れる”のではなくそれらをしっかりと考慮するべきである。質の良いタスクとは何かを常に考えなければいけない。

また、生徒の現状を理解することも大切な要素であろう。生徒の習熟度やどちらのレベルにタスクレベルを調整するか、ニーズや特徴を知ることで一方的な授業をするにではなく生徒自身が学びやすい・訓練しやすい環境を作り上げていくことが教師の課題である。

【英語科教育学 VIII】 2014/07/28

Elley, W. B. (1989). Vocabulary acquisition from listening to stories. *Reading Research Quarterly*, 174-187

研究内容

- 語彙の意味解説などを一切せずに、読み聞かせ（リスニング）により語彙習得がどの程度可能かを研究
- EFL 環境下での小学生を対象とし、ストーリーの難しさや内容も研究対象とする

手順

- 語彙のプレテストを行った一週間後に一週間のうち三回読み聞かせを行い、三日後に再び読み聞かせを行う。最後の読み聞かせをその二日後に行い、ポストテストを実施する。
- 読み聞かせの際、新出語彙の説明や定義の提示はいっさいしない。

Materials

- 英文を聞き新出語の意味を文脈で判断させ、その後のテストで意味を習得させる
- 読み聞かせ前と後での語彙テストのスコアを比較
- 単語テストでは二通りある

  →新出語彙と同様の意味を持つ絵を 4 択の中から選択する形式

  →下線が引かれた語彙と同じ意味を持つ語彙を四択の中から選択する形式

  ex) Put a cross on the picture that shows *dingy*.

1. We *summoned* the teacher. **called** **told** **stared at** **clapped**

Results & Discussion

- 生徒にとって興味を持てる・馴染みのある文章、物語文のときのほうが読み聞かせ後のテストスコアが高い

→　馴染みのあるストーリーであれば英文の内容により集中することが可となり、意味の推測が促進される

→　motivation も増加する

- その英文の中で複数回出てくる単語のほうが、1 回しか出て来ない単語よりも正答率が高い

  →　1 度聞いて意味が理解できなくても複数回出てくることにより、異なった文脈で意味を推測できる

- 意味だけでなく、音韻・発音などの oral の面での効果も期待できる

<u>今後の課題</u>

- この読み聞かせによる語彙習得方法を教育現場で活用できないか

  →　この研究の方法では時間かかかりすぎる

<u>考察</u>

本研究では語彙を明示的に学習させるものではなく、読み聞かせにより暗示的・自然に語彙を習得させることを目的としている。参加者はニュージーランドの小学生であり、研究対象の言語も英語であることにより、この研究の結果を日本人のような EFL 学習者に対してすぐに応用することは困難であると思われるが、以下の点は注目すべき点であると考える。

①ストーリーの中で語彙を習得することにより、未知語に対する推測能力の向上

②未知語を視覚的な情報としてではなく、聴覚的な情報として取り入れることができストレスやアクセントに注目させることが可能

③新出語彙の習得と同時にリスニングスキルの向上

本研究でも述べられているように、生徒が興味を持つことができる物語や馴染みのあるテキストが使用できれば、文脈上で未知語の意味を推測することが可能と考えることができる。中学校の教育実習では、発音ができない生徒が多いと感じた。しかし、この方法により聴覚的な情報から語彙に触れさせることで発音・イントネーション・ストレスなどに慣れさせることができ、非常に良い訓練になるのではないかと思われる。短い授業時間にどの程度この練習に時間を割くかなど問題は多いが、毎日ではなくとも一週間に何回か取り入れるなど、長期的な見方で徐々に向上を狙うのも一つの手段ではないだろうか。

de la Fuente, M. J. (2002). Negotiation and oral acquisition of L2 vocabulary. *Studies in second language acquisition*, *24* (01), 81-112.

概要

語彙の研究では、oral の側面での語彙習得に注目が置かれている。そこで、本研究では相互交渉が語彙習得に与える影響を明らかにすることを目指す。

Background

- Pica (1994)では、相互交渉が語彙学習(lexical learning) に効果があると主張。
- Ellis et al. では、相互交渉が理解や受容的な語彙習得に影響を与え、習得後の持続期間が長い。

Research Questions

- 相互交流に効果があるのか
- どのような種類の相互交流が受容語彙・産出語彙の習得に効果のある

participants

- 大学生 32 人

  → ①相互交流なしのグループ、②input だけのグループ、③input と output のグループ

procedure

- 地図が渡され、native speaker に目標地点までの指示を受ける

  → 指示通りの目標地点を示すことができるか
- ①：4 回まで指示を繰り返し聞くことができるが、質問ができない
- ②：質問することができるが、語彙の意味を聞くだけ
- ③：聞いた後に、native speaker に目標地点までの道のりを示す

Results

- タスク後のスコア：③　＞　②　＞　①

今後の課題

- 扱った語彙が基本的なものであったので、コロケーションやより academic な語彙で実験する必要がある。

考察

相互交流なしのグループ、質問をするだけのグループ、質問をし、自分で案内する側になるグループの３つに分けられ、③input と output のグループ、②input だけのグループ、①相互交流なしのグループの順にスコアが高い結果となった。当然の結果と言えるが、ここからわかることは以下の点である。

①文脈上で意味を推測しようとする

②実際に使用することで productive vocabulary へと変化し、記憶にも残りやすい

③リスニング、スピーキングの訓練としても応用可能

この研究でも、上で挙げた研究と同じく、文脈上で新出語彙の意味を判断する訓練になることが言える。また、Mochizuki (2003) では、語彙習得の中でも受容語彙が訓練によって発表語彙へと発展していくという一連の流れが存在することを主張している。このことから、ネイティブの道案内を聞くことでその話から新出語彙を習得し、実際にその語彙をパラフレーズしたり使用することにより、receptive vocabulary が productive vocabulary へと発展したことが裏付けられる。様々な問題が考えられるが実際に、日本の学校現場で活用する際は ALT の協力のもと同じような活動をしたり、SRST という手段が挙げられる。

以上のように、ただ単語テストを行うのではなくリスニング・スピーキング活動を通すことにより、語彙習得を促す方法も語彙指導の手段の一つとして今後も考えていくこと必要であると考える。

参考文献

Mochizuki, S. (2003). Eigogoi no shidoumanual. Tokyo：Taishukanshoten